

もう一つの『言語起源論』

テーテンスとヘルダー

辻 麻衣子(上智大学)

1770年、ベルリン・アカデミーは、とある懸賞論文を募集した。そのテーマは、「人間はその自然的能力のみに委ねられて自ら言語を発明するに至るか。また、いかなる手段によって人間はこの発明に到達するに至るか」というものだった。言うまでもなく、これは言語の起源を問うており、この懸賞で最優秀と評価されたのがヘルダーの論文、1772年に『言語起源論』として出版されることになるヘルダーの主著の一つである。ところが、これと同年、『言語と文字の起源について』という、ヘルダーの著作の題名にきわめて酷似した著作が匿名で刊行される。その著者は、ヨハン・ニコラウス・テーテンス(1736-1807)という哲学者だった。

テーテンスは、ライプニッツ・ヴォルフ学派流の形而上学と英国経験論の折衷を試みた人物であり、「ドイツのロック」「カントの先駆者」などと呼ばれることもある。カントやヘルダー、ハーマンといった同時代のビッグネームの陰に隠れ、これまであまり光の当たることがなかった哲学者だが、近年再評価の機運が高まっている。本発表では、このテーテンスによる、もう一つの『言語起源論』に着目してみたい。

そもそも、かの懸賞論文が募集されるに至ったきっかけは、懸賞の募集に先駆けること14年、1756年にベルリン・アカデミーで行われたジュースマルヒによる講演にあった。この講演でジュースマルヒは、言語が持つ秩序性や合理性を根拠として、言語は人間が作り出したものではなく、神によって与えられたのであるとする言語神授説を提出した。この言語神授説は、他のアカデミー会員から批判され、激しく、しかも長い論争を巻き起こした。そして件の懸賞論文へとつながっていく。

一方テーテンスは、この懸賞論文が発表されるよりも前から、言語の問題に深い関心を寄せていた。すでに1760年代中盤には、「語源学の原理とその効用について」および「語源学の効用について」という2篇の論文を発表している。これらはどちらも、『人間知性新論』をはじめとしたライプニッツの言語論、とりわけ語源に関する考察に触発されたものであり、彼がライプニッツに影響を受けていたことが見て取れる。また、先に述べたようにテーテンスの思想は(その成否は措くとしても)合理論と経験論との中道を行くという大きな特徴を持っているが、言語にまつわる問題についても同様の特徴を指摘することができる。これは『言語起源論』にも共通しており、彼の結論は、言語神授説を主張したジュースマルヒと人間だけが動物と異なり、理性的な思慮深さによって言語を展開するとしたヘルダーのちょうど中道を探るものだった。

以上のような背景をもとに、本発表では、テーテンスの『言語起源論』をヘルダーのそれと比較しつつ検討する。その際、重要な参照軸となるのがライプニッツである。両者がライプニッツの言語観を素地としつつ、それといかなる距離の取り方をするかという視点から、両者の比較を試みたい。また、この試みは同時に、言語、ひいては理性という人間の能力が18世紀ドイツにおいていかに捉えられていたかを知るための見取り図を提供するものなるだろう。